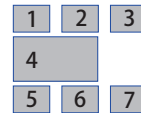


沖縄県の戦争遺跡



1. ギナン原のトーチカ (恩納村)
2. 万座毛の銃眼跡 (南大東村)
3. 当間海軍砲台跡 (那覇市)
4. 161.8 高地陣地 (中城市)
5. 陸軍宮古島中飛行場戦闘指揮所跡 (宮古島)
6. 大浜の^{えんたい}掩体壕跡 (石垣市)
7. 喜久村家の防空壕跡 (久米島)



平成 29 (2017) 年 6 月 6 日 (火) - 7 月 2 日 (日)

目 次

ごあいさつ	1
沖縄本島北部	2
沖縄本島中部	7
沖縄本島南部	12
沖縄本島周辺離島	17
宮古諸島	20
八重山諸島	23
大東諸島	26
戦争遺跡の見学について	29

※今回のパネル展・図録は、沖縄県立埋蔵文化財センターが平成27年3月に発刊した『沖縄県の戦争遺跡—平成22～26年度戦争遺跡詳細確認調査報告書—』をもとに、再構成しております。詳しくは、報告書をご覧ください。

ごあいさつ

アジア・太平洋戦争の中で、国内で唯一住民を巻き込んだ激しい地上戦が繰り広げられた沖縄県には、現在も数多くの戦争遺跡が残されています。県内ではその保存・活用について、これまで平和学習の観点から注目されてきました。国内でも、広島県に所在する「原爆ドーム」が平成7年に国の史跡に指定され、平成8年に世界遺産に登録されたことが契機となり、近代の戦争遺跡が注目され、文化財として認識され始めています。

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、文化庁の補助を受けて平成22～26年度までの5か年にわたって戦争遺跡詳細確認調査を実施しました。この調査は、考古学的手法により県内の戦争遺跡の性格・内容をより詳細に把握するとともに、今後の文化財指定も念頭に置いた保存・活用のための基礎資料を得ることを目的としたものです。この調査により、改めて県内の戦争遺跡が、1,077か所（平成26年度現在）確認できました。

本パネル展では、主に沖縄戦で使用された陣地・防空壕や、被害を受けた民間施設などを取り上げ、沖縄本島北部・中部・南部そして周辺離島、宮古・八重山諸島、大東諸島の7つの地域に分けて紹介します。

今回のパネル展が、今後の戦争遺跡を含む様々な近代遺跡の保存・活用、また調査・研究に活用されるとともに、本県にとって避けて通ることのできない歴史の大きな転換期である沖縄戦を理解する上での一助ともなれば幸いに存じます。

平成29年6月6日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 金城 亀信



沖縄本島 北部



145 遺跡

恩納村・金武町より国頭村の間と伊江島を含む北部地域には、145の戦争遺跡が存在します。今帰仁村には海軍部隊に関連する壕跡群、また恩納村にギナン原のトーチカ跡などの水際陣地が4遺跡残存しています。

日本軍が滑走路3本を有す飛行場を整備した伊江島では、北部で最も激しい戦闘が行われました。多くの施設が戦火で失われましたが、山グシの砲台跡では大砲を据えた構造が見られます。

北部では地質上、アハシャガマやニイヤティヤガマなどがある伊江島を除き、自然洞穴を利用した大規模な壕はありませんが、大宜味村根路銘や国頭村伊地鉦山などには人工壕があり、恩納村石川岳などの山間部にはカマドや平場などの住民が避難した痕跡が見られます。また、ハンセン病患者の避難壕であった名護市愛楽園の防空壕跡群や、同市大湿帯の御真影奉護壕跡は、歴史的にも重要な遺跡となっています。



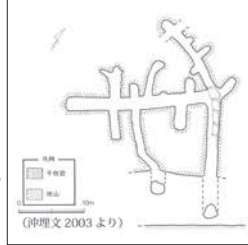
この地図は、国土地理院の「電子国土 Web」縮尺 25000 分の 1 を使用したものである

国頭村

伊地鉾山の防空壕跡群

明治期の鉾山の坑道跡を再利用した防空壕です。千枚岩を掘削して造られており、壕口が3ヶ所確認できます。1945（昭和20）年3月から空襲が激しくなり、伊地の住民が緊急時の避難用として利用したとされています。多いときで伊地集落の住民50人が非難していたようです。

現状は、一部落盤が見られますが比較的良好で、オキナワコキクガシラコウモリの生息地となっています。



略測図



伊地鉾山の防空壕跡群 壕口

大宜味村

根路銘の防空壕跡群

根路銘・大宜味の集落より約1kmの山間部の標高約120～130mあたりの谷部に位置しています。壕口が17か所確認されており、そのうちの多くは2つの壕口がコ字形に繋がったものでその長さは8～10mあります。

壕は住民によって掘られ、米軍上陸後には多くの人々が避難していたとのこと。1945（昭和20）年4月中旬には、更に山深く逃げた人々もあり、逃げ遅れた老人らには米兵によって殺害された人もいます。この大宜味村を含め、北部地域で山中に逃げた人々の多くは、6月中旬以降に下山し、収容所に送られました。



根路銘の防空壕跡群 略測図



壕口付近の壺散布状況

今帰仁村

渡喜仁の陣地壕跡群

運天港より約1km北西に位置する台地上に、2ヶ所の陣地壕が約50m離れて分布しています。1944（昭和19）年8月から運天港には蛟龍隊と第27魚雷艇隊が配備され、その時期とほぼ同時に、地域の住民を徴用して本壕の構築が開始されました。本壕は、潜水艇である蛟龍秘匿壕と呼ばれていますが、海岸から離れた平坦な台地にあることから、その可能性は考えにくいと思われます。



▲渡喜仁の陣地壕跡群 南の壕 壕口



北の壕 内部▶

本部町

本部防空監視哨跡（本部町指定文化財）

防空監視哨は、敵機を早期発見する防空監視隊の見張所として1943年に県内11ヶ所に設置されました。当時の本部監視哨の班長の証言によると、監視体制は、双眼鏡を使い4～5人交代で24時間監視し、電話は渡久地警察署に取り次ぎ報告していたそうです。

現在は、特別養護老人ホーム本部園隣接地にあり、本部町の史跡（戦争遺跡）として文化財指定されています。1階部分は造成土により埋まっており、表土上にあるのは当時の2階部分となります。



▲本部防空監視哨跡

監視窓より伊江島を臨む▶



本部町

旧謝花小学校の奉安殿 (本部町指定文化財)

奉安殿は御真影（学校に下賜された天皇・皇后の公式肖像写真）や教育勅語を保管するための施設で、謝花小学校の奉安殿は1932（昭和7）年に建設されました。西洋風神殿の鉄筋コンクリート造りで、内部には板材が取り付けられた跡があります。正面の扉や屋根にある十字のコンクリート建造物は戦後造られました。

本部町の歴史資料として文化財指定されています。謝花小学校は移転・統合され、現在同敷地内には町営団地が建っています。



旧謝花小学校の奉安殿

名護市

愛楽園の防空壕跡群

屋我地島の北東には、現在はハンセン病患者の療養施設である国立療養所沖縄愛楽園がありますが、戦時中は国頭愛楽園としてハンセン（らい）病患者を隔離していた施設がありました。この敷地内の南北に伸びる丘陵斜面には、現在では約50基の壕口があります。これらの壕は、1944（昭和19）年に、園長の早田皓が入園者や職員の避難壕として計画し、入園者自身に掘削させたもので、早田壕とも呼ばれています。愛楽園は、当時珍しかった数基のコンクリート建造物が規格的に配置されており、軍事施設と見間違えたのか、米軍機より多数の銃弾を受けていますが、これによる被害者はなかったようです。しかし、厳しい壕生活の中で、病気や栄養失調で241名の入園者が死亡したとのことです。



愛楽園防空壕跡群 中央部壕群

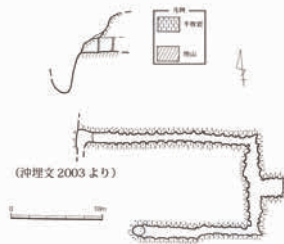
名護市

大湿帯の御真影奉護壕跡

県有林である源河の山間部の標高約120の丘陵斜面に掘られた人工壕です。壕の全長は40mで、壕口から直線的に伸び平面コ字状となっており、その中央部に約2×3mの部屋が設けられています。おそらく、この部屋に御真影が保管されたものと思われます。同様の部屋は、宮古島市野原の御真影奉護壕でも見られます。



大湿帯の御真影奉護壕跡 遠景



略測図 (神理文2003より)



中央部奥室

恩納村

ギナン原のトーチカ跡

瀬良垣海岸の干潮時は歩いて渡れる小島に、礫が多く混じったコンクリートで造られた銃眼です。銃眼は海側を向いているのではなく海岸を向いており、上陸した敵を背射するために造られたものと考えられます。なお、恩納村の海岸には、本遺跡を含め4つの銃眼が現存しています。



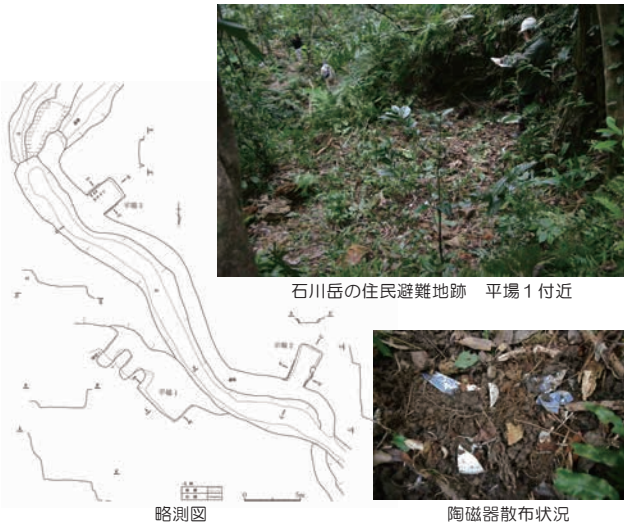
ギナン原のトーチカ 近景
(恩納村教育委員会撮影)



内部 (恩納村教育委員会撮影)

石川岳の住民避難地跡

標高約 130mの山麓^{さんろく}に位置し、現在の石川少年自然の家にある石川岳策道沿いにあります。1945（昭和 20）年 3 月 23 日の空襲以降に、石川の住民がこの地に避難したとされます。遺構としては、小川沿いの山道に取りつくように、掘り込んで造成された平場が3か所見られます。そのうち平場3は、1.8m×3.5mの空間を造成し、カマド跡と考えられる石組が見られ、避難小屋跡ではないかと考えられます。



アハシャガマ

伊江島の北東にある段丘斜面^{だんきゅう}の自然洞穴^{いまいま}で、部分的に掘り広げたところや墓として利用されたところも見られます。

壕口は7つあり、一番広い空間は約 100 m²ですが、全体としては 200 m²ほどしかありません。米軍上陸以前に、住民や現地召集^{しょうじゅう}の防衛隊員が避難していましたが、米軍上陸後の 1945（昭和 20）年 4 月 22 日ごろに、砲弾^{ほうだん}やガス攻撃を受け死者が出ました。その後、防衛隊員が爆雷^{ぼくらい}を爆発させ、住民を含めた 100 名以上が犠牲となる「集団自決」が起りました。



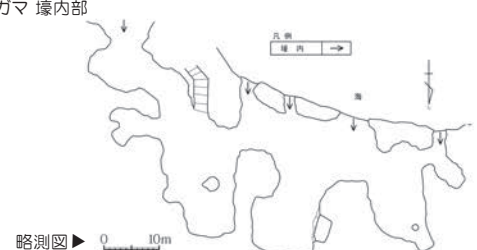
山グシの砲台跡

伊江島では、1943（昭和 18）年頃から陸軍飛行場の建設が進められ、第 32 軍の編成後は飛行場建設が強化されました。砲台^{えんたい}の掩体部分西側は岩盤^{がんばん}を利用し部分的にコンクリートを用い、東側は石積み及びコンクリートで構築されています。この掩体に大砲を置き、壁面の穴や屈曲部分に固定し、砲身を出すような形態であったと考えられます。



ニイヤティヤガマ

ニイヤティヤガマは、川平集落^{かわひら}の南海岸にあり、波の侵食^{しんしょく}によって造られた石灰岩の洞窟^{せつかいがん}です。戦中は多くの住民が避難したため、千人洞（ガマ）とも呼ばれています。現在、洞穴までには階段が設けられ、観光や修学旅行で多くの人々が訪れています。





沖縄本島 中部



193 遺跡

南は浦添市・西原町から、北は読谷村・うるま市にかけてのこの地域には、193の戦争遺跡が存在します。読谷村・嘉手納町付近の西海岸は、上陸想定地及び実際の米軍上陸地となったため、陸軍北（読谷）・中（嘉手納）・南（浦添市仲西）・東（西原町小那覇）の4つの飛行場が整備され、各地に数多くの陣地が構築されました。

本地域は石灰岩丘陵地で多くの自然洞穴があり、これを利用した様々な壕が見られます。近距離にあっても集団自決が起こった読谷村チビチリガマと多くの人々が助かった同村シムクガマは互いに近距離にあります。また宜野湾市我如古のチンガーガマは屋敷の井戸から出入りする構造です。その他、西原町にある旧西原村役場壕跡は、沖縄県で最初に発掘調査が行われた戦争遺跡であり、書類保管のため構築されたことが証言だけでなく調査でも裏付けられており、重要な遺跡となっています。



この地図は、国土地理院の「電子国土 Web」縮尺 25000 分の 1 を使用したものである

座喜味の掩体壕跡 えん・たい（読谷村指定文化財）

現在の読谷村役場北側、標高約 80m の琉球石灰岩台地上に位置します。2009(平成 21)年 1 月に読谷村の史跡(戦争遺跡)として文化財指定されています。内部に入ることはいませんが、外部からの観察は可能です。

沖縄戦時における艦砲射撃等からの破壊を受けずに、現在までいい状態で保存されています。飛行場設営に勤務していた方々の証言も多く残されているため、当時の様子を多く知ることができます。



正面



側面

シムクガマ

チビチリガマの東約 800m の地点、標高約 60m の台地上にある石灰岩の自然洞穴です。

1944(昭和 19)年の 10・10 空襲以降に、波平集落の住民避難地となり、4 月 1 日の米軍上陸時には 1200 人の住民が避難していたとされています。

シムクガマは、移民帰りの住民が米軍と交渉し、住民を説得して投降させた結果、避難した住民が全員助かったとされる代表的な事例です。また、内部に川が流れる長大な自然洞穴であったことも、人々が助かった大きな要因だと考えられます。



壕口付近



チビチリガマ（読谷村指定文化財）

波平集落の西側の谷にあるドリーネ状に窪んだ自然洞穴で、南北 2 か所の洞穴があります。10・10 空襲以後に、波平の住民はチビチリガマに空襲警報時などにその都度避難していたそうです。

米軍上陸直前の 1945(昭和 20)年 3 月末より、他所へ疎開しなかった住民が避難しました。その後、南側の洞穴で 83 名の人々が亡くなる「集団自決」が起こりました。一方、北側の洞穴に避難した人々は米軍により救出されました。



壕口付近



チビチリガマ

楚辺海岸の砲台跡 そべ

楚辺海岸に突き出た石灰岩の岩陰を利用した砲台跡で、南を向いています。

岩陰の前面に厚さ 1 m のコンクリート壁を設け、西側に大砲が据えられる砲口、東側に座って小銃・機関銃などが構えられる銃眼が設けられています。



南側出入口付近



遠景

白川の桜花掩体壕跡群

沖縄市宇白川白川原の米空軍嘉手納基地内の北東側に位置し、基地に関する建造物が多く配置された複数の丘陵地帯の一角に計8基残存します。(埋没3、半壊1等含む)

日本陸軍の沖縄中(嘉手納)飛行場の建設に伴う付帯施設として構築されたものと考えられ、1944(昭和19)年4月から同年9月にかけて、第19航空地区司令部配下の第44飛行場大隊によって整備されました。

航空特攻兵器である桜花の掩体壕としては県内唯一であり、重要な戦争遺跡といえます。



正面

埋没状況

中城湾臨時要塞 平敷屋砲台跡

勝連半島のホワイトビーチが望める丘陵に、4基の砲台跡などの遺構が分布しています。砲台は、径6mの砲座に5本の脚部を据える溝があり、その構造から88式7センチ高射砲が据えられていた可能性があります。また、砲台の排水溝に「十六年霜月」と刻まれており、同部隊が1941年11月に戦備が整ったとされる軍資料と一致します。

※霜月とは、11月の異称



砲台2 砲座

砲台2 刻銘

ウカマジーの海軍砲台跡

米空軍嘉手納基地内のゴルフ場に囲まれた丘陵「ウカマジー」東側中腹に所在し、丘陵頂上にはコンクリート製構築物(観測所と考えられる)が2基見られます。

砲門が嘉手納・読谷の海岸線を射界に収める方角に向いており、かつ砲台の位置が西側の海上から見えにくい東側に立地しています。このことから、上陸行動中の敵部隊に側面から攻撃を行う目的で構築されたと推測できます。



砲口

コンクリート製構築物②
観測窓

(中城村指定文化財)

161.8 高地陣地の戦闘指揮所・陣地壕跡群

現在の沖縄消防学校北側にあり、当時日本軍より161.8高地と呼ばれた陣地の拠点とされた戦闘指揮所跡です。戦闘指揮所跡は、岩盤に礫とコンクリートにより造られた4ヶ所の窓をもつトーチカと、その下層にある地下壕で構成されています。本陣地では、1945(昭和20)年4月5~7日にかけて日米間で激戦が行われ、米軍側は「ピナクルロック」と呼んでいました。



トーチカ 出入口より内部

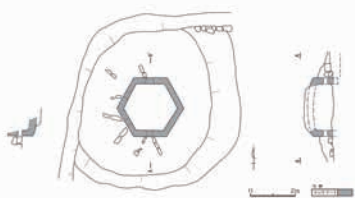
米軍作成 161.8高地俯瞰図
(「Intelligence monograph」より)

津覇のトーチカ跡

海岸低地にある津覇集落の南東側に位置し、村指定文化財の拝所「津覇のテラ」の敷地内にあります。トーチカはコンクリート製で、平面形が六角形で径3mを測り、銃眼は内陸側の東側に4ヶ所設けられています。中城村教育委員会が試掘調査を行いました。このトーチカへの入口は明確になっていません。



北西より (中城村教育委員会撮影)



津覇のトーチカ跡 略測図

がねこ 我如古のチンガーガマ

我如古集落の地下には長さ約170mの自然洞穴があり、集落内にはこれと連結している井戸が5カ所見られます。ガマの幅は平均3m(最も広い所で7m)、天井の高さは1~1.5mあります。

各屋敷地内の井戸から出入りし、壕内に避難するという我如古地区の特徴的な住民避難地です。

このチンガーガマに避難していた人々は、5月14日に米軍により救出されました。



井戸入口

嘉数のトーチカ跡

現在の嘉数高台公園内に位置し、普天間飛行場がよく見通せる為、平和学習や米軍基地の現状視察の場として利用されています。

当地は嘉数高台と称された激戦地で、当時の嘉数集落の北側に当たります。トーチカの銃眼は北方向を向いており、海岸まで約1.5km。見晴は良好であるが、トーチカ自体は地中に埋没したような形となっています。

現状では、当トーチカは重機関銃陣地か迫撃砲陣地のどちらかの可能性があると考えられます。



南より



銃眼 内部より

旧西原村役場壕跡

現在の西原町学校給食共同調理場にある丘陵に掘られた人工壕です。当時はここに隣接して西原村役場がありました。1944(昭和19)年6月頃に役場が人夫を雇い、書類保管のために構築したもので、毎朝出勤してこの壕から書類を持ち出し役場で事務を行い夕方再度保管していたという証言があります。かつての土砂採取工事で一部削り取られており、現状では2カ所の壕口を持つ約50㎡の部屋が残っています。部屋内の壁面には国旗が刻まれており、珍しい例となっています。西原町教育委員会は1985(昭和60)年に、県内で初めて本格的な戦争遺跡の発掘調査を行っています。その調査では、金庫の扉が出土しており、書類保管のために掘られたという証言を裏付けることになりました。



旧西原村役場壕跡 全景
(西原町教育委員会撮影)



国旗が刻まれた壁面



沖縄本島 南部



425 遺跡



那覇市・南風原町・与那原町より以南の地域で、425 遺跡と最も多くの戦争遺跡がある地域です。

那覇市には、第32軍首里司令部壕など多くの軍事拠点がありましたが、戦後の開発で大半が失われました。それでも航空・陸上自衛隊基地内には、当間海軍砲台跡や鏡水海軍司令部壕などの遺跡が多く残されています。また楚辺1丁目の陣地壕やことぶき山の壕跡など、那覇市の緑地公園には大規模な陣地壕が残っています。

糸満市には数多くの戦争遺跡があり、座波には良好な迫撃砲掩体が残存しています。激しい交戦により、南風原の陸軍病院は負傷者で一杯になり、南城市系数壕に分室が設けられ、さらに日本軍の南部撤退後には糸満市山城本部壕などに分散しました。各師団の野戦病院壕も八重瀬町富盛などに設けられています。また、県庁・警察部壕跡などの官公庁も地下壕に移動しました。さらに日本軍の南部撤退後に、多くの住民が自然洞穴に避難しました。



この地図は、国土地理院の「電子国土Web」縮尺25000分の1を使用したものである

第32軍首里司令部壕跡

1944（昭和19）年10月10日の10・10空襲により、更に強固な司令部壕が必要となったため、12月以降に首里城の地下で構築が始まりました。総延長1,000m以上にもなる大規模な壕で、常時灯りがともされており、「一大地下ホテル」とも称されました。安全面の配慮のため、現在は公開されていません。

首里司令部壕跡 第5坑口

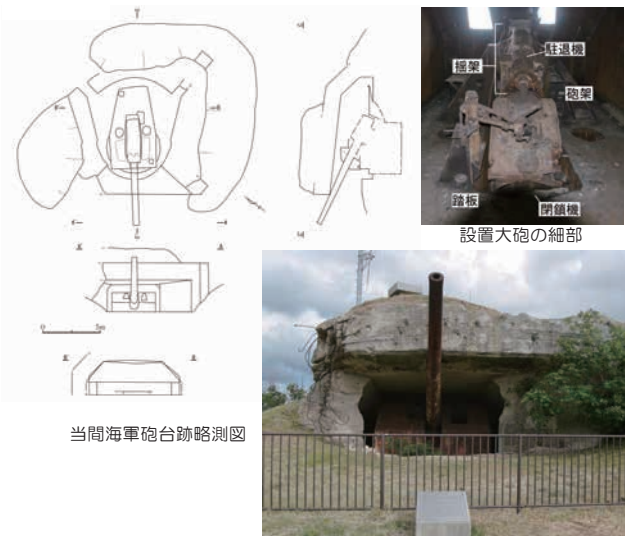


第3坑口内部



とうま 当間海軍砲台跡

現在は航空自衛隊那覇基地内にあり、西側に広がる東シナ海を含めた周囲が望める丘陵に位置します。大砲の全体を覆うための掩体（えんたい）をコンクリートで構築しており、前面が一部損壊している他は非常に残りが良いものです。大砲は口径20cm砲で、重巡洋艦の主砲を転用したものと考えられます。沖縄戦で使用した大砲が唯一原位置で現存している極めて重要な遺跡です。



当間海軍砲台跡略測図

当間海軍砲台跡 砲門

そへ 楚辺1丁目（城岳）の陣地壕跡

現在の城岳公園敷地内に位置し、丘陵斜面に多く造られていた掘り込み墓を利用した陣地壕です。墓口を出入口として、複雑に張り巡らされた通路は総延長約300mを測ります。部分的に2階構造となっていたり、階段も多く見られるなど複雑な構造で、長期的な戦闘に備えたものと考えられます。



上下の2階に分岐

楚辺1丁目（城岳）の陣地壕跡略測図（沖埋文2004を一部変更）

遺物散布状況



ことぶき山の陣地壕跡

現在の田原公園敷地内にあたるカテーラムイと呼ばれていた丘陵に掘り込まれたものです。当時、高所からこの丘陵を見ると「寿」の字に見えたことから、日本軍が名づけたものとされています。海軍の巖（いわお）部隊が構築使用したもので、コンクリートを用いたアーチ形の天井があるなど、海軍の壕として特徴的なものです。現在は、安全のため立ち入ることは出来ません。



開口部

ことぶき山の陣地壕跡
コンクリート部分のアーチ型天井

階段

内部

シッポウジヌガマ（県庁・警察部壕跡）

現在の識名霊園の一角にある台地縁辺の自然洞穴を利用し、人工的な坑道や部屋を設けた壕です。壕は約 200 m²の楕円形の自然洞穴の部分から、南に坑道が約 40m延び、幾つかの部屋状の凹みや水溜などが確認されています。県庁・警察部の避難壕として、米軍上陸以前から構築されていた壕ですが、島田知事が入ったのは、1945(昭和 20)年 4月 25日とされます。この壕内では、知事や警察部長がいた部屋の他、各課の配置が決められていたとのこと。知事は日本軍の南部撤退が決定された後、5月 25日に本壕から出て、その後は轟の壕（糸満市）などを転々と移動しました。



シッポウジヌガマ 自然洞穴部分

沖繩陸軍病院南風原壕跡群（南風原町指定文化財）

黄金森^{くみぎんせい}と通称される軟質の泥岩層^{でいがん}の丘陵全体に構築された人工壕群です。沖縄陸軍病院は、1944（昭和 19）年 9月には、非常時に備えて黄金森^{くみぎんせい}^{はえばる}^{はえばる} 一帯の丘陵に病院壕の構築を始めました。10・10 空襲を契機に、病院壕に近接する南風原国民学校に病院機能が全て移動することになり、米軍の攻撃が始まった翌年 3月末には壕を利用することになりました。病院壕は 30 基ほどあったとされ、高さ・幅が 1.8～2.0m、長さ 10～70mで、各壕を結ぶように横方向の坑道も見られます。この壕では、外傷患者の患部切断は大半が麻酔無しで行なわれました。南部撤退に際して重症患者に青酸カリ入りのミルクを飲ませるなどしたという証言が多く残されています。



沖縄陸軍病院南風原壕跡群 飯あげの道



遺物展示状況

第 32 軍津嘉山司令部壕跡^{つかざん}

第 32 軍司令部壕は、1944（昭和 19）年 4月 22 日より南風原町津嘉山に当初構築されました。この一帯は軟質な地盤であるクチャ層のため、構築しやすい反面、強度に問題がありました。戦後は埋没したために長らくその実態は不明でしたが、南風原町教育委員会が 2005・2006（平成 17・18）年度に道路建設のため発掘調査を部分的に行うことにより、その存在が明らかになりました。



津嘉山司令部壕跡 発掘調査状況



坑木列検出状況

第 24 師団第 1 野戦病院壕跡

八重瀬公園のある丘陵北側斜面の中腹に位置し、主に手術室として使用された「上の壕」と本部および患者を収容する病棟の「下の壕」からなっています。現在、上の壕には、学徒動員された白梅学徒隊による説明板や碑が建立され、見学可能となっていますが、下の壕は埋め戻されていて、確認することはできません。



第 24 師団第 1 野戦病院壕跡 上の壕



同 壕内部

とみぐすく
豊見城海軍司令部壕跡

現在は「海軍壕」として広く知られ、観光客が多く訪れます。10・10空襲時には、^{かがんじ}鏡水司令部壕では大きく揺れたため、更に強固な壕を豊見城の丘陵に構築しました。部分的にコンクリートを利用することや、アーチ型の天井は海軍が構築した壕の特徴と考えられます。



豊見城海軍司令部壕跡 案内図



通路



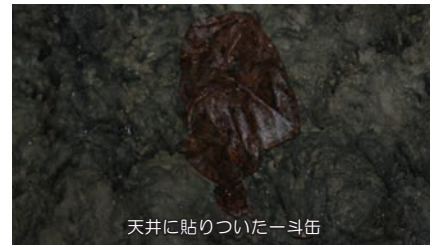
作戦室

いとかず
沖縄陸軍病院系数分室跡 (アブチラガマ)

南城市系数集落内に位置し、地元では「アブチラガマ」と呼ばれる全長 270m 規模の大きな自然洞穴です。日本軍の陣地および住民避難壕として使用されましたが、地上戦がはじまると、沖縄陸軍病院南風原壕からあふれた負傷者に対応するため、系数分室が設置されました。医療品や体制が不十分な中、600～700人の負傷兵が収容されたといわれています。現在は、南部観光総合案内センターとして、見学案内などが行われ、平和学習の場として活用されています。



沖縄陸軍病院系数分室跡 内部



天井に貼りついた一斗缶

まぶに
第32軍摩文仁司令部壕跡

第32軍司令部は、米軍上陸後の戦況が絶望的となった1945(昭和20)年5月後半に、摩文仁の89高地と呼ばれた自然洞穴を利用した陣地壕に移ることになりました。その後、6月23日に第32軍司令官牛島満と参謀長長勇は自決し、日本軍の組織的な戦闘が終了したとされます。しかしながら、一部の部隊の抵抗が見られたため米軍の掃討戦は続き、多くの住民の苦しい避難が続きました。



摩文仁司令部壕跡 壕口



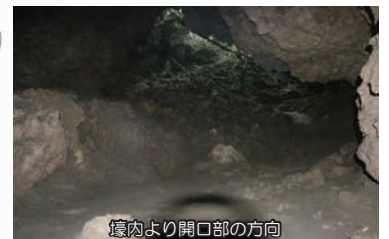
内部

沖縄陸軍病院山城本部壕跡

ひめゆりの塔から南西およそ1kmの山城集落内に位置し、地元では「サキアブ」とよばれる自然洞穴です。1945年5月末に、沖縄陸軍病院南風原壕群から撤退した本部が移され、同年6月に病院長が戦死するまで使用されました。現在は、平和学習のために訪れる見学者もいます。



開口部



壕内より開口部の方向

沖縄陸軍病院山城本部壕跡 略測図



沖縄本島 周辺離島



69 遺跡

久米島・粟国島・慶良間諸島・伊是名島・伊平屋島を沖縄本島周辺離島と捉えると、69 遺跡を数えます。日本軍が駐屯しなかった伊是名島・伊平屋島・粟国島には、軍事施設はなく住民避難壕が大半ですが、粟国島には真鼻毛の偽砲台跡があります。

慶良間諸島は、米軍が昭和 20 年 3 月 26 日と最も早く上陸した地点であり、「集団自決」が多く行われた地域でもあります。特攻艇部隊が配備され、渡嘉敷村渡嘉志久、座間味村古座間味、座間味村阿嘉・慶留間などに特攻艇秘匿壕が残存しています。また、渡嘉敷島には北山の山間部に、海上挺進第 3 戦隊の本部とされた陣地壕群と、住民が避難し「集団自決」したとされる場所が残されています。

久米島には、6 月 26 日に米軍が上陸し、その後、日本兵による住民の虐殺も行われました。10・10 空襲以前に構築された喜久村家の防空壕や、沖縄戦以前に造られた上田森の海軍特設見張所跡がいい状態で残存しています。



粟国村
粟国島
真鼻毛の偽砲台跡
まはなもう
いつわりほうたい

久米島町
久米島
喜久村家の防空壕跡
きくむらけ
ぼうくどう

渡名喜村
渡名喜島
北山の陣地壕跡群
にしやま
しんま
ごう

伊勢島
古伊勢島の特攻艇秘匿壕
関連壕跡群
ふるせ
ま
み
とくこうてい
ひ
かく
く

渡名喜村
北山の陣地壕跡群
にしやま
しんま
ごう

この地図は、国土地理院の「電子国土 Web」縮尺 25000 分の 1 を使用したものである

久米島町

喜久村家の防空壕跡

喜久村家では、1944（昭和19）年4月29日に艦砲射撃を受けたのをきっかけに、ツルハシやタムソウヤー（斧）を使用し壕の掘削を開始し、1ヶ月で完成させました。空襲の合間を縫っては畑仕事や家畜の世話をし、食事は自宅で作って食べていましたが、空襲が激しくなると壕にわらを敷いて夜も壕の中で過ごしたそうです。壁面には「大日本の力」と刻字されているのが確認できます。



▲喜久村家の防空壕跡 壕口

壁面の「大日本の力」の刻銘▶

渡嘉敷村

北山の陣地壕跡群

渡嘉敷集落より北約1.5kmの北山と呼ばれる標高200mに近い山間部中腹に現在22基の人工壕が確認されています。多くは、長さ数m前後の貫通しない壕ですが、小部屋が幾つか設けられた2か所の出入口を有するものや、全体をカマドとして使うため煙道が設けられた壕があります。米軍上陸以降に、渡嘉敷島に配備されていた海上挺進第3戦隊が造ったものとされています。なお、本壕跡群より北側の山間部には、軍により住民が移動させられ「集団自決」が行われた場所があります。現在は、国立沖縄青少年交流の家に隣接しており、この施設内より出入りでき、見学が可能です。



北山の陣地壕跡群壕3周辺

壕12内部



遺構分布図

(渡嘉敷村教育委員会提供地形図をもとに作成)

座間味村

古座間味の特攻艇秘匿壕・関連壕跡群

1944（昭和19）年9月、座間味島に海上挺進基地第1戦隊が配備され、特攻艇秘匿壕をはじめとする基地設営を行いました。1945（昭和20）年3月25日には慶良間海峡に進出した米軍艦艇から艦砲射撃を受け、翌26日には米軍の上陸により、陸戦に移行したため、特攻艇の出撃は行われませんでした。



特攻艇秘匿壕 内部



坑木痕

粟国村

真鼻毛の偽砲台跡

粟国島の最西端の真鼻崎（筆ん岬）を見下ろす台地に位置します。偽大砲を据えたとされる盛土で造られた基礎が残っています。粟国島には、日本軍は配備されておらず、在郷軍人や警防団がカモフラージュのため構築したとされています。



真鼻毛の偽砲台跡 近景



略測図



遠景




米軍撮影写真の偽戦車（左）・偽飛行機（中）・偽砲台（右）（沖縄県公文書館蔵）



宮古諸島



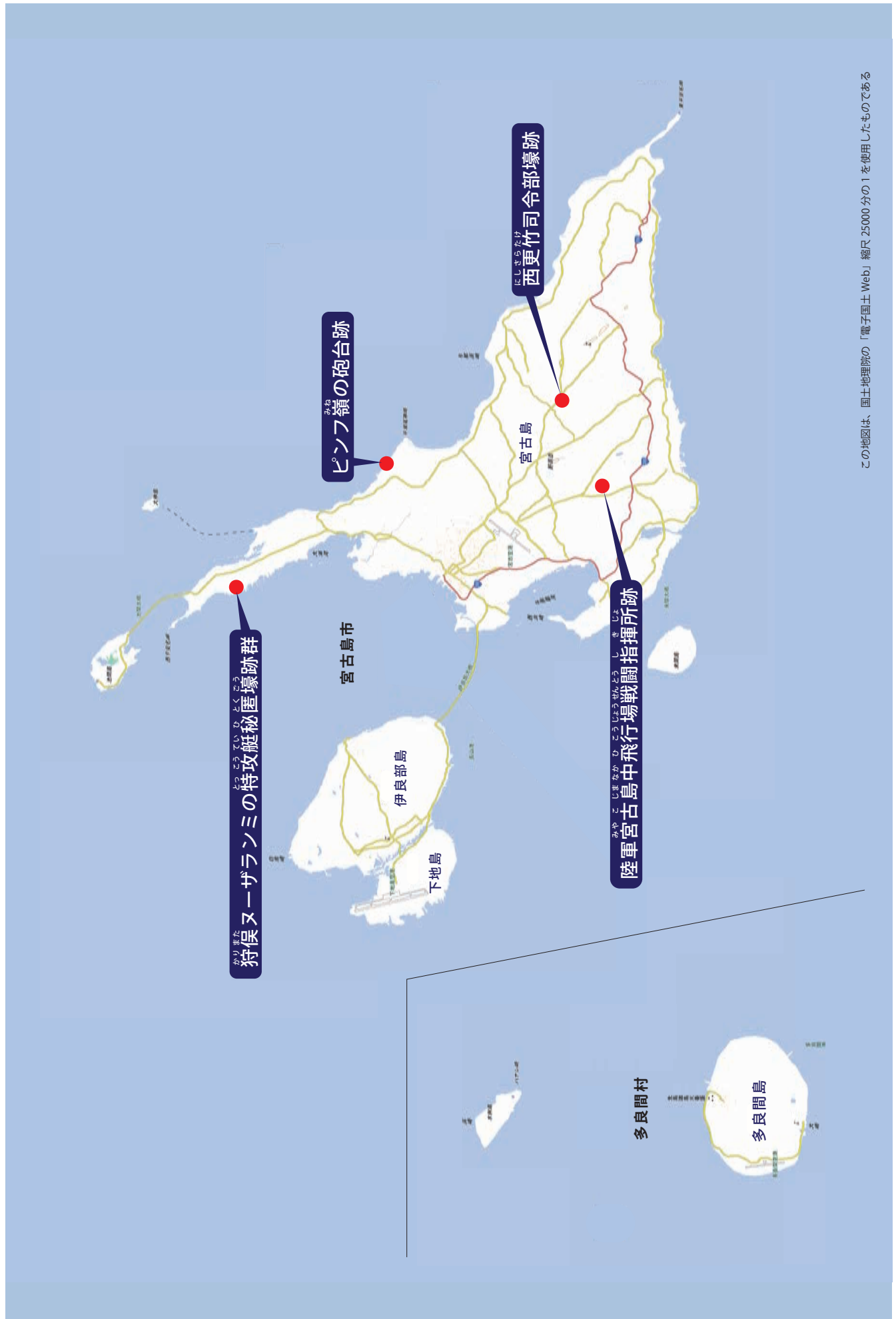
78 遺跡



宮古島・伊良部島・多良間島などで78遺跡を数えます。

宮古島には、1師団、2旅団の約30,000人の日本軍が駐屯しました。上陸戦はありませんでした。空襲・艦砲は頻繁にありましたが被弾による死者は少なく、住民約3,000人の死者の多くはマラリアが原因でした。宮古島にはかなりの兵力が配備され多くの軍事施設が造られたのですが、上陸戦がなかったため、県内では最も良好に戦争遺跡が残存しています。

また、宮古島には、3つの飛行場が建設されました。陸軍中飛行場の戦闘指揮所跡は厚さ1.4m、平面が15m四方のコンクリート製構築物で、さらに石積土塁で周囲を巡らせており、類例があまりない遺跡としてより詳細な調査が望まれています。



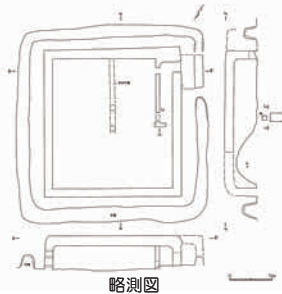
この地図は、国土地理院の「電子国土 Web」縮尺 25000 分の 1 を使用したものである

みやこしまなか
陸軍宮古島中飛行場戦闘指揮所跡

野原集落の南西側の畑地に位置し、1944（昭和19）年に建設された陸軍宮古島中飛行場に伴うものと考えられているコンクリート製構築物です。



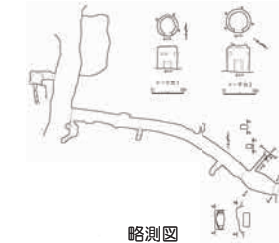
陸軍宮古島中飛行場戦闘指揮所跡



内部

ピンフ嶺の砲台跡

宮古島北東部の海岸線に面した丘陵地に位置し、標高の低い宮古島において有数の高地の1つです。ピンフ嶺の砲門は、米軍の侵攻に備え、白川浜の方向を向いており、当時の戦闘指導要領をうかがい知る上で重要な砲台跡であるといえます。西側約50mに位置するバナタガー嶺の頂上部付近には、円形の小規模なトーチカが設けられていますが、内部は狭く、実際に小銃などを構えて射撃できるかは疑問です。監視的な性格を持ち、砲台と共に機能することを目的としていたものと考えられます。



トーチカ1



さらたけ
西更竹司令部壕

宮古島の中央部にあたる城辺字長間の丘陵地に位置し、地元では知られていましたが、宮古島市教育委員会の調査でその存在が明らかになりました。総延長約220mにも及び人工壕で、直線的な通路に18もの小部屋が規格的に取りつく構造であることから、司令部としての性格が想定されました。近隣の西城小学校に第60旅団司令部が置かれていたとされており、この壕を利用していたものと考えられます。



壕口



西更竹司令部壕跡 略測図
(宮古島市教育委員会作成)

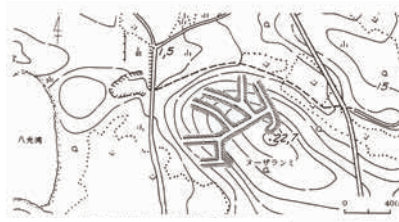


通路

遺物出土状況

かりまた とっこうてい
狩俣ヌーザランミの特攻艇
秘匿壕跡群 (宮古島市指定文化財)

狩俣のヌーザランミと呼ばれる小丘陵に位置し、現在は宮古島海中公園として整備されています。壕口は6ヶ所確認されており、いずれも内部で連結しています。隣接する八光湾まで、レールが敷設され特攻艇を積んだ台車が常備されていました。宮古島市内では、戦争遺跡として唯一、市の史跡指定を受けた壕跡です。



狩俣のヌーザランミの特攻艇秘匿壕跡群 分布図



壕内部



八重山諸島

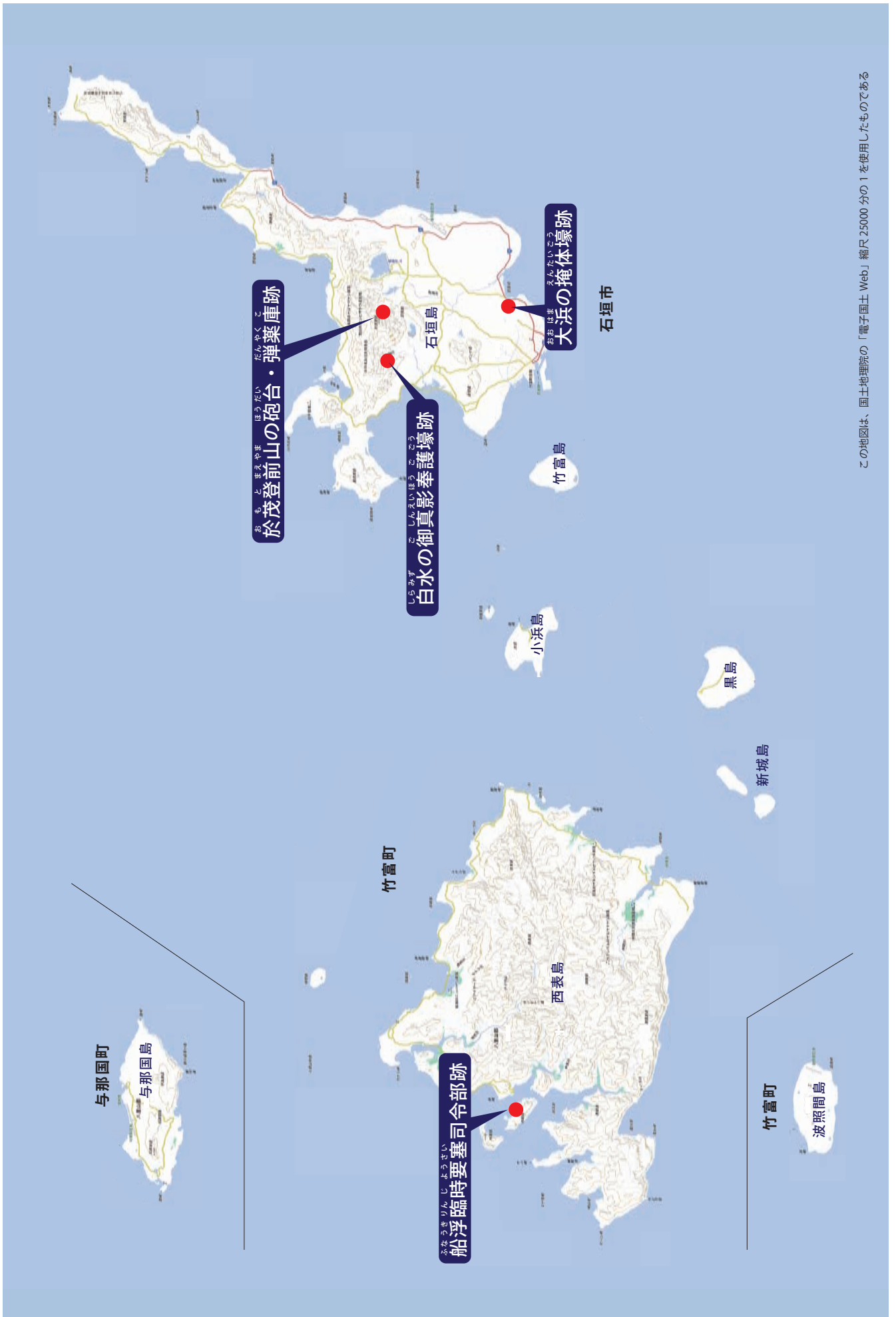
134 遺跡

石垣島・西表島を中心として、134 遺跡を数えます。

沖縄戦以前には、西表島の船浮臨時要塞や海軍北飛行場などが造られました。

沖縄戦時には、1 旅団と海軍部隊が配備され、約 10,000 人の日本軍が駐屯しました。3 つの飛行場が造られ、大浜の掩体壕や平喜名の電波探知機壕などがいい状態で残っています。その他、海岸には宮良・川平の特攻艇秘匿壕、弾薬庫が残存した於茂登前山の砲台跡、今回は取り上げませんでした。石垣島のシイ原の陣地壕跡などの大規模な壕群もあります。軍の駐屯地でもあった白水の山間部は住民の避難地でもあり、八重山支庁が構築した御真影奉護壕も残されています。

宮古島と同じく、上陸戦はなく、空襲・艦砲が頻繁にありましたが、住民約 4,000 人の死者の多くはマラリアが原因でした。



この地図は、国土地理院の「電子国土 Web」縮尺 25000 分の 1 を使用したものである

しらみず 白水の御真影奉護壕跡

(石垣市指定文化財：史跡 名蔵白水の戦争遺跡群)

於茂登岳^{おもとだけ}西方の白水地域の標高約 50～100mの山間部、名蔵川^{なくらがわ}の支流であるシサミズィガール沿いに位置します。この場所には、登野城^{とのしろ}や大川の住民が避難していたという証言があり、カマド跡などが確認されます。ただ、タコツボや塹壕^{せんこう}も多く分布しており、独立自動車第 284 中隊が駐屯していたことから、本来は軍が使用していた場所と考えられます。なお、八重山支庁が造った壕も見られ、そのうちの一つは御真影奉護壕であったとされています。



白水の御真影奉護壕跡



同 奥の小部屋

おもと 於茂登前山の砲台・弾薬庫跡

石垣島の於茂登前山の中腹の見晴らしが良好な南向きに構築され、12センチ加農砲^{かのん}がおかれていたとされます。その射程は 10～20km と考えられ、飛行場のある宮良湾方向の海上への砲撃が考えられます。また、本砲台には上方に遮るものがないので、対空砲として使用された可能性も考えられます。



於茂登前山の砲台跡 砲台 1



同砲台 2 弾薬庫内部

えんたい 大浜の掩体壕跡

2013（平成 25）年 3 月まで利用されていた旧石垣空港の滑走路北西側に位置するもので、1944（昭和 19）に建設された石垣島海軍南飛行場に伴うものとして造られたようです。掩体壕の幅は長さ 15m であるので、小型の飛行機が格納されていたものと思われます。



大浜の掩体壕跡

ふなうき 船浮臨時要塞司令部跡

内離島^{うちばなりしま}の北海岸の低地に、司令部跡の建物基礎が 2 棟確認されています。すべてコンクリート製で、トイレや濾過槽^{ろかそう}なども見られます。



濾過槽



トイレ



大東諸島



33 遺跡



現在調査が出来ない沖大東島おきだいとうしまを除き、南大東島に 19、北大東島に 14 の合計 33 遺跡が確認されています。

大東諸島だいとうしよとうは、太平洋地域の拠点として大本営だいほんえいにより重要視され、旅団規模りよだんきぼである約 6,000 人の陸海軍が駐屯ちゆうとんしていました。

上陸戦はありませんでしたが、空襲・艦砲くうしゅうかんぽうが度々見られました。

特に水際陣地みずぎわじんちが各島に多く造られ、現在把握できたのは銃眼跡じゅうがんあとが南大東島に 2、北大東島に 1 の合計 3 遺跡でしたが、その特徴がよく分かり、まだ更に残存している可能性もあります。

その他、自然洞穴を利用した具志堅洞・山下洞、御真影奉護ごしんえいほうご棚だなが設けられた黄金山こがねの 3 つの陸軍本部壕、これらよりも大規模な大東神社の海軍本部壕群、二階構造の日の丸山電波探知機まるやま でん ぼ たん ち き壕、構築者の刻銘こくめいが残る海軍監視所かいぐんかんししよなどがいい状態で残存しています。

こがねやま りくぐんほんぶごう
黄金山の陸軍本部壕跡



北大東村

北大東港(江崎)

南大東村

くしけんどうりくぐんほんぶごう
具志堅洞陸軍本部壕跡



かめいけこう かいぐんかんししよ
亀池港北東の海軍監視所跡

まんざもう じゅうがん
万座毛の銃眼跡

この地図は、国土地理院の「電子国土 Web」縮尺 25000 分の 1 を使用したものである

こがね やま りく ぐん ほん ぶ ぐう
黄金山の陸軍本部壕跡

北大東島北西の黄金山と称された丘陵の中腹にある切通し（ワイトゥイ）の両側に構築されたものです。このうち、北側に設けられた壕は、出入口を3か所設けた平面がE字形のもので、中央の部屋にはコンクリートで丁寧な造られた棚があり、ここに御真影が保管されていたようです。



壕口



御真影奉護棚

く し けん どう りく ぐん ほん ぶ ぐう
具志堅洞陸軍本部壕跡

島の中心地である集落の西外れに位置する自然洞穴で、1945(昭和20)年3月には大東島守備隊(歩兵第36連隊)の本部であったとされています。

壕内は、大きく3つの平坦面に分けられており、それぞれ階段を介したり、部屋状の空間が見られることから、何らかの機能を持っていたと考えられます。生活の様子を窺えるという意味で、重要な遺跡と評価できます。

内部西側平場
セメント加工部分

壕口

まんざ もう じゅうがん
万座毛の銃眼跡

地元で万座毛と呼ばれる南大東島の南東端の海岸絶壁に設けられた銃眼です。岩盤に掘られた高さ1m、長さ10mの坑道をくぐると、東側を向くコンクリート製の銃眼が設けられた小部屋に至ります。南北大東島では、このような銃眼が海岸一帯に設けられており、当時の陣地要図などの資料も多く残されており、日本軍の水際作戦をうかがい知るために重要な遺跡です。



銃眼より海上を臨む

万座毛の銃眼跡遠景
(中央左寄りに銃眼)

かめいけこう かいぐんかん ししよ
亀池港北東の海軍監視所跡

南大東島の南端、その外周を巡る断崖の頂部に位置し、当時の要図にも記載されたコンクリート製の海軍監視所跡です。天井部が六角形を呈し、内法径2mの部屋が監視場所となり、四周を監視できるようになっています。また、監視部屋に至る階段部の壁面には、「昭和20年5月1日建立」の文字と構築した兵士の名前が刻まれています。



天井全景 北より



南側監視窓

戦争遺跡の見学について

戦争遺跡は、危険な場所や個人の所有地であるため一般公開していないところも多くあります。戦争遺跡を見学・調査する際は、所在地の教育委員会や関係者などと事前に調整・相談を行うようにして下さい。

市町村文化財行政担当課一覧

文化財担当課	TEL	文化財担当課	TEL
国頭村教育課	0980-41-5308	豊見城市文化課	098-856-3671
大宜味村教育課	0980-44-3006	糸満市生涯学習課	098-840-8163
東村教育委員会	0980-43-2130	八重瀬町生涯学習文化課	098-835-7500
今帰仁村社会教育課	0980-56-3201	南城市文化課	098-946-8990
本部町教育委員会事務局 社会教育班	0980-47-5211	与那原町生涯学習振興課	098-835-8220
名護市文化課	0980-53-3012	南風原町生涯学習文化課	098-889-7399
恩納村社会教育課	098-982-5112	久米島町 久米島博物館	098-896-7181
宜野座村教育課	098-968-4378	渡嘉敷村教育課	098-987-2120
金武町社会教育課	098-968-8996	座間味村教育委員会	098-987-2153
伊江村生涯学習課	0980-49-2334	粟国村教育総務課	098-988-2449
うるま市文化課	098-923-7182	渡名喜村教育行政課	098-989-2015
沖縄市立郷土博物館	098-932-6882	南大東村教育委員会文化財担当	09802-2-2531
読谷村文化振興課	098-958-3141	北大東村教育課	09802-3-4138
嘉手納町社会教育課 中央公民館 民俗資料室	098-956-2213	伊平屋村教育委員会 (歴史民俗資料館)	0980-46-2384
北谷町社会教育課	098-936-3159	伊是名村教育振興課	0980-45-2318
北中城村生涯学習課	098-935-3773	宮古島市生涯学習振興課	0980-77-4947
中城村生涯学習課	098-895-3707	多良間村教育課	0980-79-2675
西原町生涯学習課	098-944-4998	石垣市教育委員会文化財課	0980-83-7269
宜野湾市文化課	098-893-4430	竹富町教育委員会総務課	0980-82-6191
浦添市文化課	098-876-1234	与那国町教育課	0980-87-2002
那覇市文化財課	098-917-3501		

関連文化講座のご案内

第 68 回文化講座

沖縄の戦争遺跡 — 「記憶」との対話を求めて

講師：吉浜 忍（沖縄国際大学 総合文化学部教授）

日時：平成 29 年 7 月 1 日（土） 14：00 ～ 16：00（受付 13：30）

会場：当センター研修室 定員：140 名

予約不要・参加無料



沖縄県立埋蔵文化財センター **入所無料**

〒 903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7 TEL：098-835-8751

開所時間：午前 9 時～午後 5 時（入所は午後 4 時 30 分まで）

休所日：月曜日 ※慰霊の日（6 月 23 日）は開所致します

交通：沖縄自動車道西原 IC より車で 10 分

市外線バスターミナル発 那覇バス 97 番

首里駅発 那覇バス 94 番（但し、平日のみ運行）

「琉大附属病院前」下車徒歩 3 分